

# ESSENTIAL

研 究 生 活 を 応 援 す る 情 報 誌

# EYELA

[エッセンシャルアイラ]

2006年

WINTER

Vol.03

特集 最先端科学の研究現場から

## 水中での有機化学プロセスを 実現するナノ触媒システムの 構築に挑む

分子科学研究新

魚住泰広教授

予算申請のための  
EYELA製品の  
ご紹介





COVER PHOTO  
分子科学研究所  
魚住泰広教授と  
研究室のみなさま

# CONTENTS

002 INTRODUCTION はじめに  
東京理化学株式会社 取締役副社長 千野英樹

004 特集 最先端科学の研究現場から (第3回)  
分子科学研究所

魚住泰広教授に聞く  
水中での  
有機化学プロセスを  
実現する  
ナノ触媒システムの  
構築に挑む

010 研究者のON&OFF  
岐阜薬科大学創薬化学大講座 佐治木弘尚教授  
薬学も野球も、日々の鍛錬とチームワークから

東京理化学の真実

014 EYELAのカスタマーセンター  
「どんな疑問や要望でも結構です。  
私たちカスタマーセンターをご活用ください」

019 開発者が語るEYELA製品  
マイクロウェーブ反応装置

021 研究者が語る  
芝浦工業大学工学部応用化学科 小泊満生教授  
「無機固体による高選択的な合成反応及び合成手法には  
マイクロウェーブ反応装置は欠かせない」

024 テクニック 「冷却水循環装置の選定手順」

028 レンタルサービスをはじめます!

031 予算申請のための  
EYELA製品のご案内

- 032 有機合成装置1
- 034 有機合成装置2
- 036 有機合成装置3
- 038 液体クロマトグラフ
- 040 恒温器・試験器・乾燥器、純水製造装置
- 042 冷却水循環装置・低温水槽・恒温水槽・冷却トラップ装置
- 044 濃縮装置・減圧装置
- 046 濃縮装置、抽出・精製・蒸留装置、培養システム
- 048 凍結乾燥機・噴霧乾燥機、定量送液ポンプ、攪拌機
- 050 遺伝子・細胞工学機器、振盪機、滅菌器、他

「07-08 総合カタログ」

051 掲載新製品の紹介

- 052 EYELA有機合成装置シリーズ
- 056 低温恒温水槽、冷水循環装置
- 058 光安定性試験器



059 EYELA'S EYE 「セレンディップの3王子」

060 EYELA製品単品カタログ

062 「靴選び」で健康になる

066 MUSIC REVIEW 「唄うカドには Jumpin' Jive Flash!」

068 BOOK REVIEW 「年末年始に読みたい本」

070 EYELA掲示板 「みなさまのお便りから」

071 ESSENTIAL EYELAのホームページ案内

072 全国販売店マップ

074 「日本語」力の楽しみ方 あなたの日本語、意外と合っていない?

076 クロスワードパズル

## 特集

# 最先端科学の 研究現場から ③

インタビュー／佐藤彰芳 撮影／倉部和彦

自然科学研究機構  
「分子科学研究所」



20世紀に入って大きな発展を遂げた近代有機化学だが、その約100年間はほとんどすべて有機分子を有機溶剤に溶かして溶液としていた。通常有機化学反応＝有機溶剤中の反応と考えるのが化学者の「常識」であった。しかし、本当にそれが常識なのか――。

有機分子の源泉はすべて生命によって作りだされている。生命がつかさどる化学反応システムは、すべて「水中」で「不均一反応系」「触媒的」に「高効率・高選択的」に実施されている。そこで、「生命が水中でいともたやすく行っているこの理想的な化学反応システムを人為的に水中でできないか」と、1995年から「水中での有機化学のプロセス」実現に挑んでいるのが、岡崎にある分子科学研究所の魚住泰広教授であ

る。研究に対する姿勢と考え方、研究内容について話を聞いた。

### 研究環境は自由であること、フェアであることが重要だ

魚住泰広教授の研究姿勢の原点は、北大大学院時代、のちに北大学長になった伴義雄教授の研究室にあるという。魚住 ミーハー的に伴先生が一番大物の先生に見えたので、その研究室に入れていただきました。ところが大物すぎて、研究室にはほとんどいない（笑）。伴先生と会話をする機会はあまりなかったから、学問的に影響を受けたということはないんですが、学問に対するフィロソフィーというのは本人が研究室にいらなくても研究室全体に漂っていて、そういう意味では大きな影響を受けました。

——具体的にはどのような影響ですか。魚住 やはり「自由」ですね。例えば、伴先生の研究室には当時、助手として森美和子先生（1991年猿橋賞受賞、のちの北大名誉教授）がいらして遷移金属触媒の化学を研究されていました。まだ女性の研究者は少ない時代で、家庭と研究を両立させるのは、保守的で古い体質の研究室では不可能だし、やはり自由な雰囲気がないとできません。また伴先生はもともと天然物合成化学が専門で、遷移金属触媒という研究は伴研究室の主流ではありませんでした。それでも研究ができたということは、この研究室に森先生が是非やりたいと果敢に挑戦していく姿勢を認める自由があったということです。

のちに伴先生が退官されて、当時38

分子科学研究所

## 魚住泰広教授に聞く

Yasuhiro Uozumi

# 水中での有機化学 実現する ナノ触媒システム



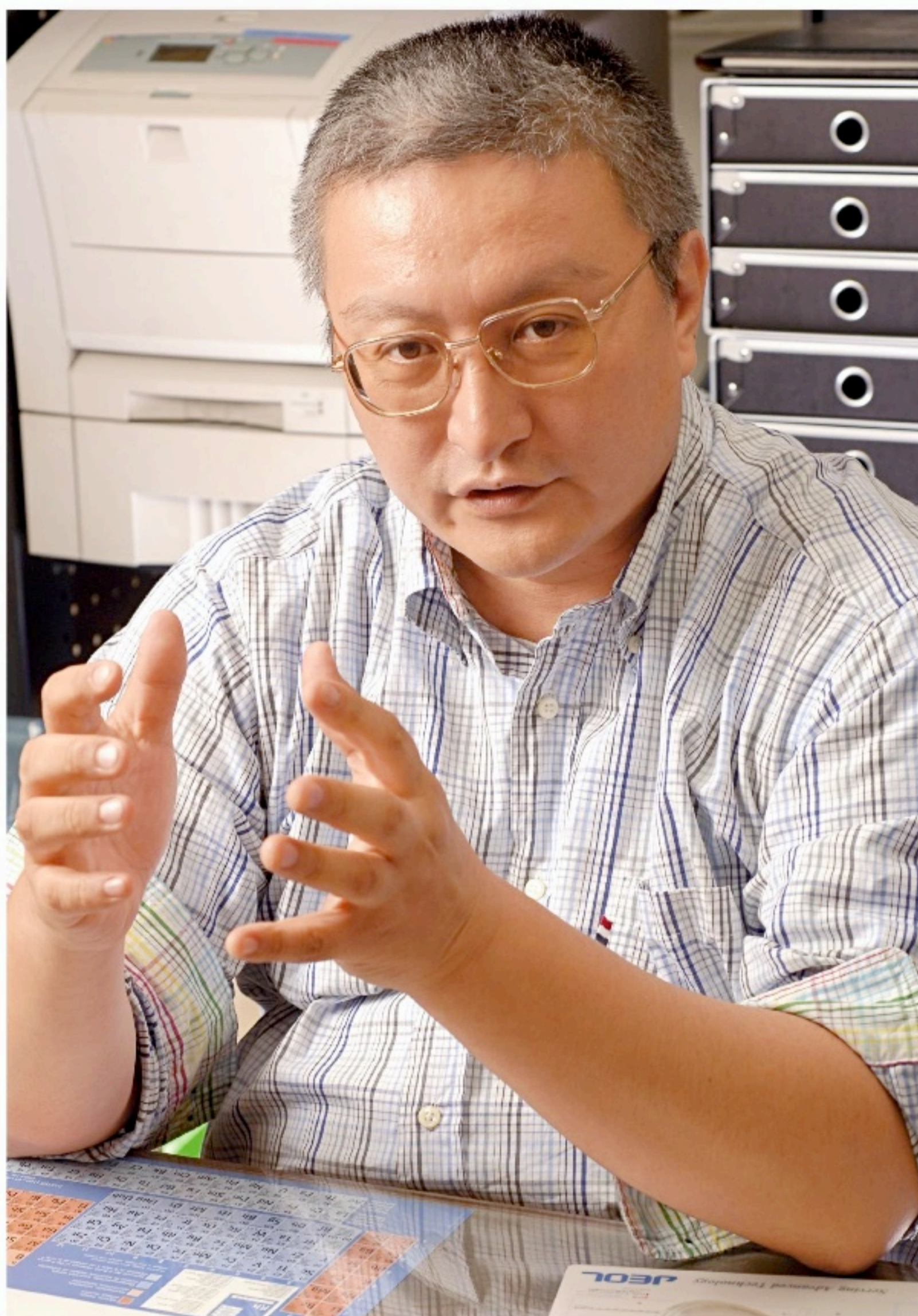
## PROFILE

うおずみ・やすひろ ●1961年北海道札幌市生まれ。1984年北海道大学卒業。1986年同大学院薬学研究科修士課程修了、1990年薬学博士。北海道大学薬学部教務職員、同触媒化学研究センター助手、米国コロンビア大学リサーチアソシエイト、京都大学大学院理学研究科講師、名古屋市立大学薬学部教授を経て、岡崎国立共同研究機構（現在は自然科学研究機構）分子科学研究所教授。総合研究大学院大学教授を併任。

歳ぐらいだったと思いますが、東大から柴崎正勝先生（2005年日本学士院賞受賞、現・東大薬学部長、日本薬学会会頭）が後任教授としていらっしゃいました。研究室に森先生をはじめとしてアクティブな研究者がいるにも関わらず、逆な意味でもフェアな目で日本で最高のポテンシャルのある研究者を探してくる自由さがあり、非常にフェアな環境でしたね。

——自由であること、フェアであることは研究者にとっては大きいと……。

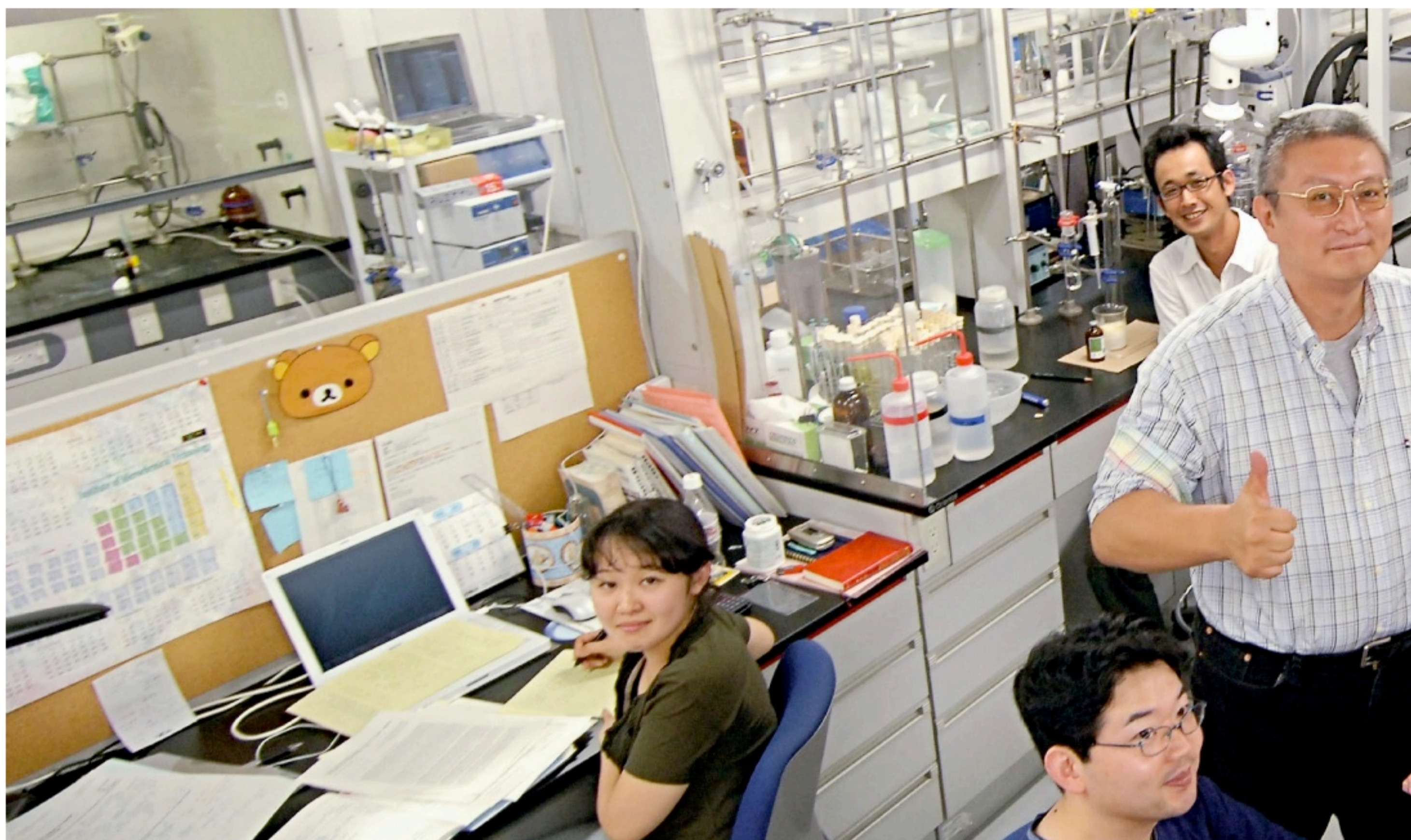
魚住 非常に重要なことです。体質が保守的であれば、自分が上位にいてポジションが空いていれば次は自分がなれるんじゃないか、助手であれば自分が助教授になれるんじゃないかと思う。しかし、フェアに評価されるということにな



# 学プロセスを

「水中での有機化学プロセス」は環境調和・リスクフリーを目指した次世代プロセスとして注目を浴びている。自在かつ精密な有機分子変換プロセスの水中での固定化触媒による実施を一挙に実現する新しい「ナノ触媒システム」構築に挑戦している自然科学研究機構・分子科学研究所の魚住泰広教授に登場願った。

# の構築に挑む



ると、常に自分が年齢的に上だから次のステップに行けるというものではなく、やはり、きちんとしたアクティビティを示さないと次の道はない。厳しいといえば厳しいが、フェアといえばフェアです。アクティビティを示していれば、次の道が開けるということを意味していますから、やる気を出す人にとっては非常にやり甲斐のある環境だと思います。——魚住先生も伴研究室に入ることによってやる気が出たわけですか。

魚住 そうですね。私はもともとやる気のある好青年でしたから、やる気が維持できたということでしょうか(笑)。

——年齢にも地位にも関係なく、自分の研究をほかの先生方が客観的に見ていたというわけですね。

魚住 私は日本でよくいう「公平」とか「平等」という言葉はあまり好きではない。公平という言葉は日本語として非常に曖昧で、「ユニフォーメーション」と「フェア」という二つの意味がある。ユニフォーメーションというのは昼寝してる人も、一生懸命働いている人も、同じ年に入社して同じキャリアなら同じ給料ですね。フェアというのはよりよくやっている人には好待遇があり、やってな

い人には悪い待遇が当然。どっちをもって公平・平等と呼ぶのかは非常に難しいですが、研究の世界ではやはり、あらゆる意味でフェアであるべきと思っています。だから私は、ユニフォーメーションは嫌いです。

——日本には成果主義と年功序列という両方が存在し、お互いに良い部分も悪い部分もあり、フェアな環境というのは難しいですね。

魚住 成果主義に走って、最近問題になっている捏造や不正に繋がっては何の意味もない。日先の成果ではなく、本質をきちんと評価する仕組みがない限りは真の成果主義というのは成立しない。それを成立させるのは、評価する側と評価される側の信頼関係ですね。そういうものをきちんと構築していくことがフェアに繋がる。極端なことをいえば成果が上がってないなら「君はクビだ」という辛い選択もあるし、それを納得できるだけの信頼関係は必要だと思います。

——実際に構築するのは難しいですね。

魚住 私がドクターの頃、さきほどの柴崎先生が教授で赴任されて来ましたが、当時私は柴崎先生のケミストリーに対するコントリビューション、貢献はほと

んどない。しかも私はストレスばかり与えていました。柴崎先生としては、当時の私は博士課程の学生でしたから、私に自分のテーマをやって欲しいわけです。でも先生の提案を私は「後でやってきた教授が何をおっしゃっているんですか」と丁重にお断りするわけです。また、北大の薬学には非常に自由な雰囲気があって、伴先生は当時名誉教授ですが、私達は伴先生を「伴さん」と呼んでいた。ところが柴崎先生は「さん付けは失礼だ、伴先生と呼ぶべきだ」というわけです。それはごもっともなだけけど、大きなお世話だと「伴さん」と呼び続けた。やりにくい学生だったと思います。だけど、柴崎研究室でポジションが空いたときに、「研究室に残ってはどうか」とオファーしてくださった。それは非常にフェアというか、自分に対してのコントリビューションもなく、イエスマンでなくても、「アカデミックなポジションに残って伸びていくチャンスを与えよう」と評価してくださった。そうやって研究者としてのスタートラインを示してくださったことに非常に感謝していますが、こんなに逆らった人間をよくとる気になったなあ、と思いますね(笑)。



——柴崎先生も困った学生をお持ちでしたね（笑）。

魚住 当時はあんまり仲良くなかったですけど、今はすごく仲が良いですよ。たぶん柴崎先生に聞いても、「彼とは非常に仲が良くなかった」と、はっきりおっしゃるはずです（笑）。

### 水の中だからこそ、疎水性相互作用で反応をコントロールする

魚住教授は、柴崎正勝教授のあと、異例の抜擢で京大からやってきた林民生教授（2002年日本化学会賞受賞、現・京大教授）とも出会う。「超一流の先生方と一緒に研究できたことが私のものすごい財産です」という。

魚住 本格的な遷移金属化学、不斉触媒反応のイロハからもう一度勉強しなおした貴重な経験でした。林先生にはガスクロの打ち方、論文の書き方からスキノの遊び方まで公私にわたって本当に「仕込んで」いただきました。今でも私のグループのセミナーやコンパの運営まで林流が色濃く残っていますね。

——94年～95年にかけて米国コロンビア大学リサーチアソシエートとして留学していますが、そこを選んだ理由は、

魚住 二つ理由があります。一つはマンハッタンで休日は音楽三昧の生活がしたかったこと（笑）。ジャズとブルースのコレクションは今では約1万枚。研究室でも時間があればギターを弾いています。マンハッタンである楽器店に入ったら、エリック・クラプトンがギターの試し弾きをしていて黒山の人ばかり。そこに現れたのはなんと、ジェームス・テラーですからね、すごいでしょ（満面笑みである）。

——音楽の話は長引きそうなので、二つ目の理由をうかがいましょう（笑）。

魚住 ……ですよね。米国に行く前に、今の研究の方向はある程度具体的に見えていましたから、当時日本ではまったくスタートしていなかったコンビナトリアル化学、特にその一つの技術である固相合成であるとか、そういうようなことを習得するのが目的でした。そのときに習得したことは今の研究の土台としてかなり生きています。

また、それ以前の有機化学では、精密な有機化学の制御の仕方というのは非常に排他的でした。つまり、二つの可能性があったら一つを潰し、それによってほかの一方だけが残る。これが化学制

御する概念でした。それに対して私は、二つの可能性があったら、その一方に、よりそちらに行くように誘導してやる。例えば、ある反応剤が右のほうに反応するのか、左のほうに反応するのかというとき、左がだめだから右に行くのではなく、より右に行きやすいから行くという積極的なコントロールの仕方に興味があった。それはモレキュラー・リコグニッション（分子同士がお互いを認識し合うこと）からスタートするわけで、そうした原理や研究がどのように展開しているのかを学ぼうと考えていました。

実際に生体の中では、水素結合とか様々な相互作用によって、よりこっちのほうが行きやすいからおいで、というようにコントロールがなされているのに、フラスコの中ではあまりなされていなかったというのが現状でした。実は分子設計上のダイヴァーシティ（多様性）の重要性や能動的相互作用の分子設計への組み込みなどは、当時の林先生の触媒設計思想から拝借したものでもあります。——それが水中での有機化学合成研究につながり、今話題のグリーンケミストリーでもあるわけですね。

魚住 私自身は、グリーンケミストリー

を考えていたわけではありません。分子同士が疎水結合でお互いを認識し合うということは、合成化学的には今まで有効に使われてきていなかった。ところが、例えば受容体のところに医薬品が近づいていくシステムというのは、疎水性相互作用による部分が結構多いわけです。これは有効に使わなくてははいけない。しかも有機化合物である以上、基本骨格はCHで疎水性なわけです。有機化合物は水酸基があれば水素結合できますが、それはどの有機化合物にでもある普遍的な官能基ではない。それに対して、炭化水素というのはどの有機化合物も必ずその部分を持っている。それこそ疎水性なわけで、疎水性相互作用で反応をコントロールできるならより有機化学の中で普遍的に使える相互作用に違いない、という確信があった。であるならば、それが一番有効に使える反応は水なんです。だから私は、動機としてグリーンケミストリーがあったわけではなく、結果としてグリーンケミストリーに結びついたわけです。

### ナノサイズの粒子触媒を使い、水中の有機化学反応を促進する

—水の中での有機合成研究を始めた当時、まわりの反応はどうでしたか。

魚住 それはもう、キワモノですよ。

—キワモノですか。

魚住 例えば、「どうして水の中でやるんですか？」という質問がくるわけです。私の答えは「どうして水じゃないの」。

つまり、有機化合物というのはすべて生命活動から生まれてくるわけです。石油だって生物のカスなわけです。有機化合物というのは元来生命体から生まれてきているし、われわれの体は水ででき

ていますから、その生命体の中での化学反応というのはほとんど水のような媒体の中でやっているわけです。むしろフラスコの中でトルエンだ、ベンゼンだ、エーテルだというのは、こちらのほうが代用品なわけです。

ところが、そういうフラスコ反応の歴史が約100年ありますから、むしろそれが当たり前になっていて、水の中で有機反応をやるのが目新しく映ってしまう。でも、長い生命の歴史を考えたら、水中じゃない媒体で化学反応をやっていることのほうがキワモノであって、人為的なものじゃない自然界の化学反応というのはほとんど水中です。逆に問えば、水中じゃないこと理由を述べてみよ、と。

枯渇性資源である石油は燃えるし毒性もある。どうしてこれでなければいけないのか。その正当性のほうがないんじゃないか。だけど中学校、高校からずっと習ってきた化学反応というのは有機溶媒でやるわけで、どうして水の中でそんなことやるんですか、となるわけです。

—なるほど。約100年間同じことを続ければ、いつか常識となるわけですね。  
魚住 世の中にはそういう常識っていっぱいある。多分、ヌーディストの人に聞けば、服を着ていることのほうが異常だっていいですよ。だって、生物はみんな裸じゃないかと。私は服を着ていますが、彼らの言い分は一理あるわけで、そういうものですよ。

—現在の研究テーマは、さらに発展させた「水中での精密な有機分子変換を実現するナノ遷移金属触媒」ですね。

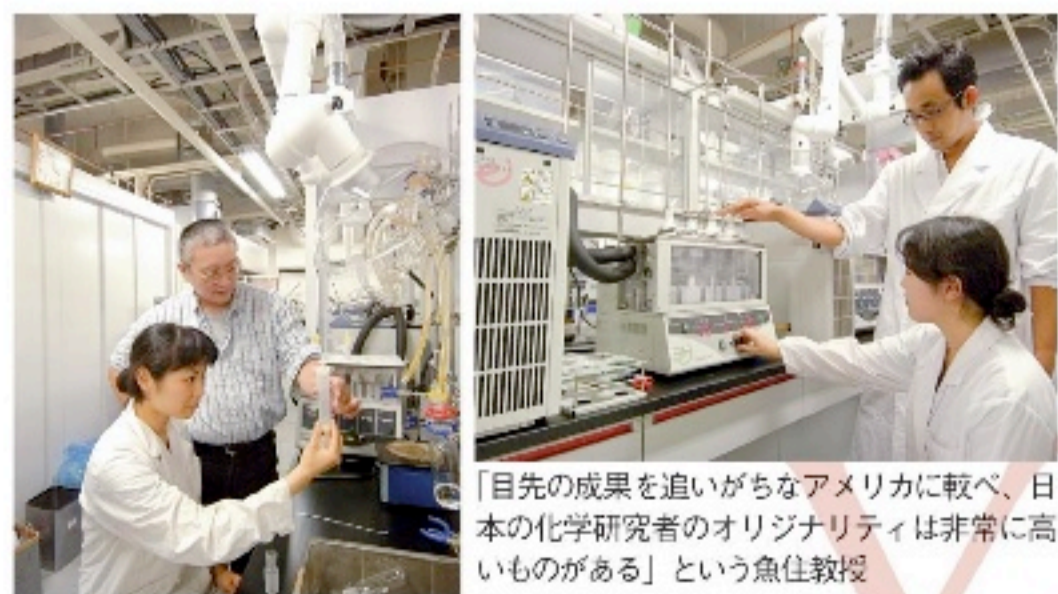
魚住 水中で反応をやるときの一つの日印になるものとして、酵素反応があります。酵素のある反応のポケットの中に反応させたい気質を取り込み、そこで望

みとする反応をさせるというのが基本です。分子を取り込むポケットはどうしても分子サイズ、ナノサイズの空間を作っていないとできません。

特に水中で反応をやり始めると、有機分子が持つ疎水性の性質に基づいてその分子が触媒に近づくということが必要なわけです。そういうときに分子が近づきやすいようなナノサイズの反応の場がないと分子は取り込めない。そこでナノサイズの反応の場というものを意識するようになりました。

それに加えて反応をやっていく過程で、それまでは錯体触媒、分子性の触媒が多かったわけです。ちょっと立ち返りますが、水中で有機反応をやらせるための反応場は水とも馴染まなきゃならないし、かつ有機分子を取り込まなきゃならない。そのための一つのトリックとして、私たちは両親媒性の高分子というものを反応場に使っていたわけです。こういう高分子であれば水の中に入れても当然水の中に溶けている酸や塩基のいろんなイオンを中に取り込むこともできますし、かつ水の中に溶けない油分、有機分子を取り込むいい反応場になるわけです。この両親媒性の高分子の反応場の中に、錯体触媒や様々な分子性触媒を埋め込み、それによって触媒反応をやらせるということをしてきたわけです。

そして2000年過ぎには、錯体ではなく、ナノ粒子を高分子の中で発生させるということを始めました。錯体は高分子の中に組み込んでいますから、その錯体から金属の小さな粒として析出させるという方法で、高分子のマトリックス、要はプラスチックの固まりの中で金属の粒子を発生させるということがうまくいき始めました。



「目先の成果を追い及ばないアメリカに比べ、日本の化学研究者のオリジナリティは非常に高いものがある」という魚住教授

「うちの研究室には何時に来て何時までいるというルールはない。常識の範囲内で自由に研究を進めればいい」

# Yasuhiro

ただ通常は、金属粒子を発生させますと、ものによってはどんどん結晶が育って大きな粒になり、ナノサイズじゃなく、ただの砂粒になってしまうこともあるわけですが、高分子の中で発生させればある程度大きくなっても、それ以上は物理的に動けません。マトリックスの中に金属の粒子が分散したような形のナノ粒子の発生が起こる。それができれば、先ほど述べたように両親媒性の高分子ですから、水の中で様々なナノ触媒の反応ができるに違いありません。そういうナノ粒子というものは、普通の粒子に比べたら非常に細かいものですから、表面積は非常に大きいわけです。今までの反応ではいかなような反応が起こるといふことがあるわけです。そういうことを考え合わせると、水の中で小さなナノサイズの粒子触媒を使うならば、反応速度も非常に高いし、我々が考えている水中の反応にもつながる。これは非常に面白い展開になるんじゃないかと思えます。

### 研究室で優先されるのは、サイエンスとして何をやりたいか

——さて、こうした研究テーマはどのようにして生まれてくるのでしょうか。

魚住 そうですね、私の場合は大学の学部レベルの教科書からテーマを探します。具体的には学部の教科書を見ていたら、ほとんどの有機化学反応の溶媒は有機溶媒でした。だったら、本当にそうなのかと疑うことで、「そうでなかったら教科書が書き変わるな」と思うわけです。それぐらいの幼稚な発想ですね。幼稚なら幼稚なほどいい。もし、小・中学校の理科の教科書に書かれていることをひっくり返すような研究テーマならノーベル賞ものですね。

——この研究室の方針は何でしょうか。

魚住 多少苦しくても、ルールを作らないことです。ルールを作らないということは、学生も研究員も自分で限界を作らないということで、とにかくまず優先されるべきなのは、サイエンスとして何をやりたいかであって、お金がないだの、場所がないだの、人がいないだのを研究を阻害する理由にしちゃいけない。研究のためなら一生懸命企画書を書いて研究費を引き出すべきだし、地球の裏側に共同研究したい人がいれば行けばいい、よその研究機関で実現する可能性があれば自分が移ればいい、そこを解決したらいいだけの話。ルールを決めないとはそういうことで、自分の勝手な限界やハードルなどそういうものを設定する必要はまったくないということです。

——日常のルールもいらない？

魚住 私たちの場合は成果が上がって論文になって、国際的な学術誌に載ってナンボなわけです。成果至上主義はNGですが、自己満足だけでもダメです。朝の9時から夕方6時まで毎日休まず働いて、皆勤賞だからこの論文通してくださいっていても通らない。家に病人がいるから生活が苦しいからといても通らないわけです。そこは冷たいようだけれども、仕方ないんです。逆に成果が出ていけば、鼻くそほじってようと、その辺で昼寝しようとは私は別に構わないわけです。

あとはやはり、この研究室が何を目標しているかということきちんとさせること。それは極端にいうと、ワールドカップを目指すところにはワールドカップを目指す人たちが集まってくるという雰囲気づくりが重要で、研究室のルールなんて何もいらないんです。

「ルールを作らない」と研究室の中でもギターでブルースを奏でている魚住教授。ジャズ&ブルースの貴重なSPレコードコレクションを研究室の戸棚に入れているほど。音楽専門誌でも執筆する魚住教授に、今号の66ページ「Music Review」でも執筆していただいた



# Uozumi



## M

## MUSIC REVIEW [CD・レビュー]

今号のテーマ 唄うカドには Jumpin' Jive Flash!

スウィングしなきゃ意味がない!  
楽しくないじゃ意味がない!吾妻光良と Swingin' Boppers  
Seven and Bi-decade

(VICL-62027)

## 01

タイトルの通り結成27年目を迎えた「吾妻光良とSwingin' Boppers」の新譜がリリースされた。今では「明るいナマハゲ」か「唄う落武者」かと言われるバンマスの吾妻氏がまだ紅顔の青年（今は厚顔の中年）の頃、早稲田大学卒業記念に結成したビッグバンドであり、メンバーのほとんどが別に職を持つサラリーマンバンド。その内容、キャリア、個性はまさに日本一のジャンプバンドと断言できるが、残念ながら第二位以降は心当たりさえない。唯一無二の個性を発揮する吾妻氏のギターは猥雑で無茶苦茶に聴こえるが、実は

なかなか真似のできない見事な芸であり、ドラム、ベース、ピアノのリズム隊もしっかりしている。ピッチが悪かろうと気にせず吹ききるラッパやリードの潔さもバッチグウ！ そもそも「ジャンプ」ってなんだ？ 「ジャイヴ」ってなにさ？ と言われても答えようがない。ただ一つ間違いないのは「楽しくスウィング」してるのである。とにかく楽しく本気でバカバカしく聴いてほしい快作怪作！ さて、本作は現在の世相に鋭く切り込んでみせる。

一曲目、スピード感溢れる「最後まで楽しもう」でオープニ

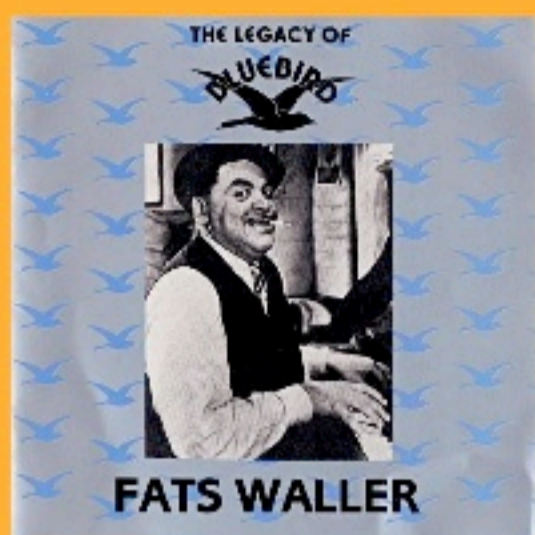
ング。「IT Boogie」では近年の情報技術を取り上げ、ネット依存の危うさを看破する。東京スカパラにボーカル客演した曲の替え歌（盗作？）「マーケットプレイス」やノスタルジックなジャイヴ調の「しかしまあ何だなあ」も一度聴くと耳を離れない。「俺の血圧 150~300」では、メタボリック症候群の兆候を見逃さない先取性がある。ゆとり教育のひずみを歌う「学校出たのかな」は出来の悪い大学院生諸君の心をわしづかみにするに違いない。

Joe Liggins、Luckey Millinder、Lee Morganなどの往年の名曲

を見るも無残に改作したカバーは、よく原作者が使用許可を出したと感嘆。また国内盤初回プレス特典と噂されるライブ音源2曲も見事なできだが、そもそも海外発売や追加プレスの予定は全く不透明だ。

Boppers にはかつて「ゴミの日くるまで」という名曲がある。「IT...」「150~...」と合わせて「環境・情報・ライフ」であり、これに「ナノ」が入れば総合科学技術会議も驚く重点推進4分野の制覇である。





道化師 太っちょトーマスが  
短い生涯に遺した  
大きな足跡

Thomas "Fats" Waller  
Fats Waller

(BVCJ-7023-24)

02

巨漢 Thomas "Fats" Waller は数々のスタンダードジャズの作者であり、ハーレムピアノの名手であり、不世出の歌い手であり、バンドリーダーであり、そして何よりもエンターテイナーであり、その足跡はまさに「Your Feet Too Big」であった。声も表情も演奏も、ペーソスに富む彼の全てが楽しく明るく、そして泣けてくる。

どれ一つの駄作もないが、やはり一押しは名唱「ねむそうな二人」か。常に楽しいこの巨人の演奏からは、その僅か40年弱の風来坊のような人生の本音を見いだすことは難しいが、彼の陽気な唄を聴けば聴くほど切なくなってくる魔法。差別による非業の死を遂げた Thomas "Fats" Waller は、黒人がショービジネスで生きていくために道化を演じなければならなかった時代背景の中で、黒人に生まれた悲哀を一度も歌うことはなかった。筋金入りの意地っ張り。



40年代アメリカ最大の  
ヒットメーカーの  
無敵のビート

Louis Jordan  
The Best of Louis Jordan

(MCAD-4079)

04

とにかくノリノリのビート感。ジャンプの王様は筈谷幸生でも両津勘吉でもなくて Louis Jordan! 1940-50年代の米国最大のヒットメーカーの一人と言いきれる。

トムとジェリーでトムさんが可愛いネコ嬢の窓の下でベースを片手に歌うセレナーデも Louis Jordan。映画 Blues Brothers で兄弟がアパートでかけるレコードも Louis Jordan (曲は Let the Good Times Roll)。代表曲は「Choo Choo Ch'Boogie」「Caldonia」「Knock Me a Kiss」「Saturday Night Fish Fry」など数え切れない。「Five Guys Named Moe」は後年 Cameron Mackintosh (キャッツ、オペラ座の怪人、ミスサイゴンなどの制作者) によってミュージカルとなり、Chuck Berry は Louis Jordan を源流としつつ、それをギターバンド形式に置き換えて Rock'n Roll 世代の成功者となった。



ナット・キング・コールの  
原点は小粋なジャイヴで!

Nat King Cole  
In the Beginning + 4

(UCCU-5185)

03

「Unforgettable」「L-O-V-E」でお馴染の Nat King Cole は「モナリザ」「Too Young」の名唱もあり、甘口のムード歌謡とも捉えられがちだが、その原点には小粋なジャイヴ魂が詰まっている。ピアノの腕前も超A級であり、モダンジャズピアノの開祖と位置づけて良い。

キャリア最初期 1940-41年のトリオ (p,g,sb) 録音を集めたかつての名盤LPに4曲おまけ付きのCD化。盟友 Oscar Moore のギターも素晴らしく「軽妙洒脱」という表現がこれほどはまりのトリオもいない。Art Tatum、Ray Charles といった後年の Jazz、R & B 界の巨人たちも初期にはこのトリオフォーマットを真似たほど、その影響力は大きかった。「Sweet Lorraine」の甘美、「Scotch'n' with the Soda」の粋、「Call the Police」の洒落、「Hit That Jive Jack」の軽み……でも染みてくる。



ユーミンが  
クレージーキャッツを  
永い眠りから起こした  
2006年の奇跡!

Crazy Cats & Yuming  
Still Crazy For You

(TOCT-4982)

05

ナベプロ50周年に感謝です。ユーミンが楽曲を提供し谷啓とデュエット。間奏での“お呼びじゃない”語りは植木等。犬塚弘、桜井センリも参加している。そして故人であるハナ肇、安田伸、石橋エータローなどの往年の演奏に加え、渡辺晋のベース演奏もサンプリングでそこかしこに挿入されている! 今の録音技術の凄さ!

楽曲は1950-60年代のアメリカカポピュラー風であり、歌詞もメロも素晴らしい。まさにこれは「クレージーキャッツのニュー」であり、今もまだクレージーに「Still Crazy For You」なのです。装丁は今や絶滅した十吋 (25 cm) サイズ、ジャケットでは若かりしクレージーとユーミンが微笑む。なお、昭和最大の音楽エンターテイナーであったクレージーの楽曲はナベプロ50周年の2006年に大量にリイシューが進んだ。そのハチャメチャぶりには21世紀でも色褪せない。